

# 古代ペルシア楔形文字フォント

(~~ラピユタ文字~~ ⇒ B7uX フォント)

𐎠 𐎡 𐎢 𐎣 𐎤 𐎥 𐎦  
a b c d e f g  
ch x

𐎧 𐎨 𐎩 𐎪 𐎫 𐎬 𐎭  
h i j k l m n

𐎮 𐎯 𐎰 𐎱 𐎲 𐎳 𐎴  
o p q r s t u  
θ ku

𐎵 𐎶 𐎷 𐎸 𐎹  
v w x y z  
vi sh

𐎺 𐎻 𐎼 𐎽 𐎾 𐎿 𐏀 𐏁 𐏂 𐏃  
1 2 3 4 5 6 7 8 9 0  
ji di mi du gu nu ru tu mu ç

赤のところは私が当てたものです。

「e」に当てられている「x」はロシア語の「ハ」の音、

「o」に当てられている「θ」は英語の「TH」の音です。

古代ペルシア語はラピユタ語と違って「e」と「o」の音はありませんでした。

もちろん、大文字小文字の区別もありません。

ですので、どちらで打っても同じ字が打ち出されます。

ちなみに、「V」となっていますが、発音は英語の「W」の音でした。

また、この楔形文字は短母音の「a」を書かないので「K」と「カ」の両方を「𐎠」で表しました。

「𐎡」は「ku」となっていますが、単体では「ク」を表さず、「𐎢(u)」が振られて初めて「ク」の音を表しました。

なぜか、「k+u=ku」とは綴らず、「ku+u=ku」と「母音」をダブらせて綴るんです。

(1 ji 「𐎠𐎢」 ~ 9 mu 「𐎠𐎢」も同様!)

なぜこれらの文字だけ母音をダブらせるのかは未だに謎です。

文字種も現存する碑文にあるのがすべてだとは限らないので、この謎は永遠に歴史の闇の中かもしれません。

ちなみに、0の「𐀀」は「s」に近い音だとされているので、「ç (セディーユ)」が当てられています。

フランス語表記に転用できますね。

## 数字

𐀀	𐀁	𐀂	𐀃	𐀄
@	[	;	]	:
百	十	廿	一	二

数字はローマ数字のように「**足し算式**」で表します。

千は私の想像ですが、「𐀃」を使ったのではないかと思います。

(二千は「𐀃𐀃」)

「0」はありませんでしたが、

2016は

ⅨⅣⅣ

と綴れたのではないか。

でもこれだと、単に千を表したいときは前後の文脈任せになるので、やはり何か別の文字があったのかもしれませんが。

ちなみに並べ方ですが、

3は

Ⅲ

30は

Ⅸ

です。

同様に5・7・9系統はどの位も「+1」の構図になります。



# 単語区切り

、 、  
、 \_

楔形文字には分かち書きがなく、単語区切りが使われていました。

コンマやピリオドもありません。

碑文によってどちらかの単語区切りが使われていました。

ラピュタでは長い方の「、」が使われています。

## おまけの楔

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百 一百一十 一百一十一 一百一十二 一百一十三 一百一十四 一百一十五 一百一十六 一百一十七 一百一十八 一百一十九 一百二十 一百二十一 一百二十二 一百二十三 一百二十四 一百二十五 一百二十六 一百二十七 一百二十八 一百二十九 一百三十 一百三十一 一百三十二 一百三十三 一百三十四 一百三十五 一百三十六 一百三十七 一百三十八 一百三十九 一百四十 一百四十一 一百四十二 一百四十三 一百四十四 一百四十五 一百四十六 一百四十七 一百四十八 一百四十九 一百五十 一百五十一 一百五十二 一百五十三 一百五十四 一百五十五 一百五十六 一百五十七 一百五十八 一百五十九 一百六十 一百六十一 一百六十二 一百六十三 一百六十四 一百六十五 一百六十六 一百六十七 一百六十八 一百六十九 一百七十 一百七十一 一百七十二 一百七十三 一百七十四 一百七十五 一百七十六 一百七十七 一百七十八 一百七十九 一百八十 一百八十一 一百八十二 一百八十三 一百八十四 一百八十五 一百八十六 一百八十七 一百八十八 一百八十九 一百九十 一百九十一 一百九十二 一百九十三 一百九十四 一百九十五 一百九十六 一百九十七 一百九十八 一百九十九 二百

二百は私の想像で加えたものです。

本来の楔形文字にありません。

300は

三〇〇

と綴ったのではないかと考えています。

また、「𐎧」も本来の古代ペルシア楔形文字にはありません。

単語区切りと似ていますが、向きが反対です。

でも、他の楔形文字にはあるので、おまけで追加しました。

## 欠番

.!&?”

楔フォントにしていけないので、ペイントフォントに常備されているフォントが表示されます。

テンプレートに対してサイズが大きいため、行が連なると見えづらいです。

でも、他の楔と一緒に使うことができます。

特に！？はセリフなどにオススメです。





# Lusheeta Toel Ur Laputa

ルシエータトールウルラプタ  
ルシエータトールウルラプタ

「ウル=王」なので「ウ (王)」も可！

ルシエータトールウルラプタウルラプタ

# Muska 9uska

ムスカ ユスカ

ムはローマ字風だと「m+u=mu」だが、  
「mu+u=mu」でも、読める！！読めるぞ！！

# Romuska Palo Ur Laputa

ロムスカパロウルラプタ

ロムスカパロウルラプタ

# Dola Do-la

ドラ ドーラ

母音の長短を区別しないのでドラなのかドーラ  
なのかは曖昧。

「-」を長音記号（ー）に転用するのも手！

Laputa

𐄂𐄃𐄄𐄅𐄆𐄇𐄈

rapyuta

𐄂𐄃𐄄𐄅𐄆𐄇𐄈𐄉𐄊𐄋

ヤ行もローマ字風に「y」を挟んで表記できます。  
もちろん、英語転写するのも十分ありですよ。

ba7usu

𐄂𐄃𐄄𐄅𐄆𐄇𐄈𐄉

ba7ush

𐄂𐄃𐄄𐄅𐄆𐄇𐄈𐄉𐄊

ba7ux

𐄂𐄃𐄄𐄅𐄆𐄇𐄈𐄉𐄊

b7ux

𐄂𐄃𐄄𐄅𐄆𐄇𐄈𐄉𐄊

↑はこのフォント名になっています。

これは「バルス」の語源のひとつといわれるトルコ語「バルシュ barış (平和)」を古代ペルシア語風に綴ったものです。

bは「バ」と「b」の両方を表しましたが、この場合は「バ」の音です。



「お静かに！」

「お静かに！！」

「言葉を慎みたまえ！！」

「言葉を慎みたまえ！！」

「君はラピュタ王の前にいるのだ！」

「君はラピュタ王の前にいるのだ！」

「見ろ！！人がゴミのようだ！！」

「見ろ！！人がゴミのようだ！！」

「どこへ行こうというのかね！？」

「どこへ行こうというのかね！？」

「3分間待ってやる！！」

「3分間待ってやる！！」

「時間だ！！答えを聞こう！！」

「時間だ！！答えを聞こう！！」





さあ出かけよう

ひときれのパン

ナイフランプかばんに

つめこんで

父さんが残した

熱い思い

母さんがくれた

あなまなざし

あなまなざし

地球はまわる

地球はまわる

君をかくして

君をかくして

輝く瞳

輝く瞳

きらめく灯火

きらめく灯火

地球はまわる

地球はまわる

君をのせて

君をのせて



